

父らが生きて証し残す

風化と闘う

ヒロシマ
見つめる県人たち

〈中〉

「私たちが語るのかわらぬ」。広島市出身で、両親が被爆者の敬和学園高校（新潟市北区）の英語教諭西沢慶子さん（57）は毎夏、その思いを新たに。約20年前から平和記念式典に合わせ、生徒を広島に引率してきた。授業では、平和教育に力を注ぐ。多数の犠牲者を出した広島女学院中高校の証言集を使い、原爆の恐ろしさを伝えてきた。それは「平和の種まき」なのだという。「話を聞いた生徒が1人でも2人でも誰かに話して、種をまいてほしい」と思う。生徒が「戦争はしたくない」と話したり、卒業生が大学で平和運動に取り組むサークルを立ち上げたりするようになった。「ヒロシマ」の思いは着実に伝わっ

2、3世

ていると実感する。そんな学校での活動とは裏腹に、政府は集団的自衛権の行使容認に向けた動きを強める。西沢さんは、海外での武力行使に道を開きかねない政府の動きに怖さを感じる。「昔の政治家は戦争を知っていた。でも、今は戦争の悲惨さを忘れている」と思う。県内の被爆者は3月末時点で1221人、平均年齢は約82歳で、今後の活動には2世、3世を含む次の世代の力が必要になってくる。

平和とは
新潟から問う

部外者意識捨て活動参加



平和記念公園の原爆慰霊碑に頭を下げる西山謙介さん＝6日、広島市

6日、平和記念式典に初めて参列した県原爆被害者の会事務局次長の西山謙介さん（66）＝長岡市＝は、父親が被爆者だ。黙とうの瞬間、涙がこみ上げてきた。「2世である自分も、ヒロシマの部外者ではないんだ」と実感した。これまで「被爆を体験していない自分が、平和運動に参画していいのか」と迷っていた。しかし、自らの体験を語らずに父親が亡くなったとき、答えが出た。「原爆の記憶は、思い出し

第1期生の保田麻友さん

だ。だからこそ、集団的自衛権に言及しなかった広島市長の平和宣言には失望した。「戦争がなかったら、原爆は落ちなかった。戦争になってから反対しても遅い。歴史から何も学んでいない」と思った。苦しみを押し隠して亡くなった父親を思い、語気を強めた。被爆体験をいかに後世に伝えるか。体験者の高齢化が進む中で、広島市は2012年度から被爆体験の伝承者養成事業を始めた。きれなかった私たちの責任です」

たくないほどつらいものなんだ」と思い至ったからだ。父親らが生きて証しを伝え残さなければいけないと、60歳で活動に参加した。

（29）＝広島市＝は被爆3世だが「3世という肩書が邪魔」と話す。原爆の話語り継ぐことに、2世や3世という「資格」はいらない。「誰もが伝承者であるべきだ」と思う。

伝承のために被爆者からじっくりと体験談を聞いた経験から「被爆者の苦しみ」を知ることが、戦争や平和を考える一番のきっかけになると痛感する。

集団的自衛権の議論が本格化し、戦争への参加が現実味を帯びてきた現状が心配でならない。「もし日本が戦争の道を選んだとしたら、被爆者の苦しみを伝えきれなかった私たちの責任